香葉

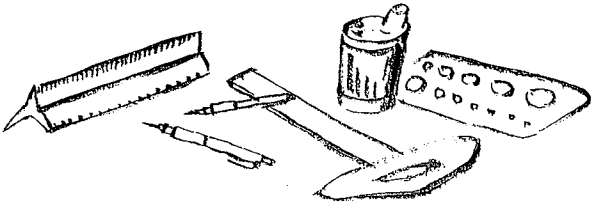
—記念号—

2001　　NO. 30

目　　次

ホームカミングデーのお知らせ …… 1
ご出席予定の先生方 …… 2
学長挨拶 …… 吉田　博 …… 3
香葉会のこれから …… 古城房子 …… 7
女専のページ …… 8
県央の集いお知らせ …… 10
覚え書(28) …… 上市二郎 …… 11
短大50年を振り返って …… 吉田美佳 …… 18
実体験型取材(若葉の頃) …… 浦上　恵 …… 22
ハンソン山から …… 26
坂田記念館より …… 28
岩川眞由美先生講演会 …… 坂東奈苗(要約) …… 29
クラス会報告 …… 31
母校ニュース …… 33
編集雑感 …… 34
平成12年度決算・平成13年度予算 …… 35
賛助金 …… 36

表紙 …… 関　頼武
カット …… 杉山貴子
　　島村ひとみ



今年度の香葉会（同窓会）は一大ホームカミングデーを開催いたします。短大にとっての大きな変革を前に卒業生が一堂に会し、尚一層の応援をして行きたいと思います。是非ご参加ください。

日　時：平成13年11月23日（金）正午～午後3時
場　所：関東学院女子短期大学 チャペル 及び 食堂
受　付：11時15分～　チャペル3階
会　費：無　　料
※軽食をご用意いたします。

人数把握のため、同封のハガキにて出欠のご返事を10月末までにお知らせください。これ以降の出席のご連絡は直接お電話で**香葉会事務局（045−787−7859）［FAX兼］にお願いいたします。**

♬ ♬ ♬

☆当日の予定☆

チャペルにて、礼拝・学長挨拶・パイプオルガンミニミニ演奏会・総会
食堂にて、懐かしの写真展・記念写真撮影コーナー・懇談
を予定しています。お楽しみに！

当日ご出席予定の先生方一覧は次のページです。

ご出席予定の先生方

青柳　明
朝倉陸夫
浅田寛厚
新井信一
安東裕躬
伊東光浩
犬木瑛子
井上恵美子
井上裕子
岩佐壮四郎
梅沢信生
栄本和子
江口真理子
大越公平
大越ひろ
大谷立美
大塚野百合
大豆生田　啓友
岡松和夫
折橋撤彦
蔭山友行
加藤紀子
金子義幸
川崎　宏
菊池美恵子
岸　正尚
粂川光樹
倉沢新一
小玉敏子
小林　進

小室康平
近藤　弘
三枝源一郎
佐久間不二男
佐々木昭子
佐々木摂子
佐藤三郎
篠崎貞子
杉野要吉
杉山久仁子
鈴木登紀男
鈴木秀雄
宗　恵子
L.Turley
高木幹太
高橋敏夫
高橋　博
立花　桂
田山美智子
津久井　学
手嶋登志子
照沼晃子
土井清民
徳永　透
所澤保孝
富岡幸一郎
鳥越ノリ
内藤　明
中田弘良

S.Nishi
林　淳三
M.ビグデン
日向一雄
深沢広助
藤沢憲太郎
冨和美智子
帆苅　猛
真坂孝二
松下倫子
丸山昭一
水沼淑子
御園和夫
宮川喜代江
村上　顕
矢嶋道文
柳瀬昌弘
山口和子
山崎稔恵
山下多恵子
山下輝彦
山田哲雄
山中義昭
吉田　博
吉見富美子
渡辺紀子
和田淑子
……
上市二郎

（2001年7月末現在、敬称略、50音順）

学長挨拶

＊学長　吉田　博＊

季節は秋を迎えようとしておりますが香葉会の皆さまはいかがお過しでしょうか。日々、エネルギッシュに人生を謳歌されることを願っております。

国民的な人気の小泉総理も、「現代社会は明治維新や第二次世界大戦後に匹敵するほどの転換期にある」と申しておりましたが、まさに同感でありまして、教育の世界においても十八歳人口の激減や社会・経済システムの高度化・複雑化、グローバルな情報・知識社会の急激な進展のなかで、今、心の豊かさを感じることのできる社会や多様な生き方や価値観が受容される社会を構築し得る人材の養成が求められております。

昨年の『香葉』の挨拶のなかで、（一）関東学院女子短期大学は大きく転換しようとする時代の流れのなかで、二十一世紀においても存在感のある教育機関としての役割を担うべく構造改革に着手したこと。（二）十八歳人口の激減や女子の四年生志向、共学志向、資格志向という時代的背景のなかで、関東学院女子短期大学を関東学院大学の一学部（人間環境学部）に改組・転換することを確認したこと、などを述べていたかと思います。

この一年間、教職員の全面的協力、古城会長を始めとする香葉会の全面的バック・アップのもとに新学部の基本構想や教育方法についての多くの議論、多くの作業がなされてまいりました。本年四月二十七日にはそれらを「認可申請書類」として収斂し、六月五日には文部科学省・大学設置審議会による面接審査が行なわれました。そこでは人間環境学部の設置基本構想について約一時間ほどの質疑がなされましたが、然したる質問もなく、面接審査は無事に終了いたしました。現在、平成十四年四月の設置に向けて、教職員一同、人間環境学部実現への道を突き進んでおります。

この構造改革の動きのなかで、情報、噂というものは不思議なものであることを実感しております。それは、「関東学院女子短期大学がなくなる」という、「なくなる」という言葉のみが先行し、「残念、淋しい、悲しい」という手紙を卒業生より時折、いただくことです。しかし、事実はそういうことではありません。関東学院女子短期

大学の人間環境学部への改組・転換は、文部省でいう「平成十二年度以降の大学設置に関する審査の取扱い方針の中の短期大学から大学への改組・転換という特例事項の範疇」で行なわれるものです。役所の文章というものは極めて難解でありまして、この文章を説明するならば、（一）関東学院女子短期大学の教育の専門性をベースに、新たな教育ビジョンを展開して学部としての基本構想を構築しなさい。（二）女子短大の校地、校舎、設備等を有効に活用して人間環境学部を立ち上げなさい。（三）女子短期大学の五十年の伝統のうえに築きあげられてきた教育理念、教育方法を十分に生かしなさい、ということであって、関東学院女子短期大学の教育環境の向上がその大前提になっております。したがって、それらの大前提のもとに行なわれる改組・転換は、大きく転換しようとする現代社会に対しても柔軟に対応し得る魅力ある教育ビジョンを有する教育機関でなければならず、このような理念、教育目標で展開される人間環境学部への改組・転換は女子短期大学の発展的展開以外のなにものでもなく、決して女子短期大学がなくなるという消極的なものではありません。

関東学院女子短期大学は二十世紀半ばに設立され、五十年の歴史を歩んでまいりました。この二十世紀という時代は、人類にとっては試練の時代であったと言えるかと思います。その展開は、急速で高度な科学技術の発展や高度な工業化社会の成立と表裏一体となって実現され、一方では物質的に豊かで快適な生活を享受することが可能になりましたが、他方では物質的な豊かさにともなって「こころ」の在り方に起因する様々な問題が発生し、教育の現場にも社会問題として取り上げられるような事例が次々登場するようになりました。そして現代社会はこれまで経験したことのない急激な少子・高齢化社会を迎えることにもなりました。この人間環境学部では建学の精神に則った特色のある教育研究を実践することにより、時代が求める豊かな人間性と教養を備え、現代社会が抱える様々な課題に対して新たな視点から総合的に探究し解決することのできる人材、言い換えれば、豊かな感性と強い精神力をもって社会に積極的に関わり、新しい世紀を担うことのできる人材の養成を目指したいと考えております。

人間環境学部の母体となる関東学院女子短期大学は、現在、英文科、国文科、家政科（家政専攻、生活文化専攻、食物栄養専攻）、幼児教育科および経営情報科の五学科三専攻から編成されております。この度の改組・転換は関東学院女子短期大学の総合短大としての特色である幅広い専門性をベースに、また関東学院がミッションスクールであることを再認識しつつ、「人間性の在り方」とともに、「人間と環境の関わり」について新たな視点からアプローチをはかり、「人間活動の在り方」を探究

しようとするものであって、これを実現するために学問上の同一性を確保しつつ、女子短期大学の五学科三専攻を再構築し、人間環境学部として次の四学科を設置することにいたしました。すなわち、現代コミュニケーション学科（入学定員一八〇人、収容定員七二〇人）、人間環境デザイン学科（入学定員九〇人、収容定員三六〇人）、健康栄養学科（入学定員一〇〇人、収容定員四〇〇人）、人間発達学科（入学定員一〇〇人、収容定員四〇〇人）です。

学部名に冠している「人間環境」という言葉の理解でありますが、次のように考えております。私たちにとっての「環境」とは、私たちを取り巻く「社会」とその社会を支えている「自然」という二つの関係で捉えることができます。そして、人間の生活と活動が他の生物とは比較にならないほどの広がりと複雑さを持つことを考慮するならば、地域環境や地球環境のように、人間活動の範囲に応じた仕方で環境を限定したり、生活環境や社会環境や文化環境のように人間活動の種類に応じた仕方で環境を区別することができるかと思います。この度、設置しようとする人間環境学部は、狭義の「自然環境」の視点からではなく、「生活環境」や「社会環境」や「文化環境」のように、人間活動の種類に応じた仕方で環境を広く捉え、コミュニケーションやメディアや人間のネットワークをも包括する広義の環境を、人間環境の概念として発展させていくことにより、人間を中心とした特色ある教育を目指したいと考えております。

二十一世紀が生み出す技術や文化は環境との持続的共生関係を築くものでなければならず、それは環境と共存・調和するものであると同時に、人間性の発展をも促すものでなければなりません。人間環境学部に設置する四学科ではこうした理念を具体的に展開すべく、「現代コミュニケーション学科」では、人間と文化への深い理解をベースに、社会の生産活動としてのコミュニケーション、ビジネス活動、情報メディアを、また、「人間環境デザイン学科」では、社会の持続的発展と共生を可能にするライフスタイル、生活環境、環境保全を、「健康栄養学科」では、人間が生涯にわたって健康に生きるために必要な食生活環境、健康管理を、そして「人間発達学科」では、一人ひとりの人間が心身ともに健やかに発達することを援助するための家庭環境、子育て環境、コミュニティ環境を主要なテーマとしながら、「人間の在り方」とともに、「人間と環境との関わり」について教育・研究に取り組んでいくことにしております。この「人間環境」という概念こそ、今日の現代社会で発生している様々な問題を統一的に考えていくためにも、またそれらに対して何をなすべきかという意味での実践的、倫理的な視点を得るためにも有効であると考えております。

私は、未来に生きる学生諸君にとって最も必要な能力

はどのような状況下にあっても他者と共生しながら最善を尽くせる体勢をつくりだす、しなやかでたくましい能力ではないかと考えております。そして自分の人生をデザインできる能力を「デザイン力」と呼ぶとすれば、これからの時代に最も必要とされる能力は、すぐに陳腐化してしまう即戦力としての能力ではなく、他者と共生しながら生きることができる、しなやかでたくましい「デザイン力」ではないかとも考えております。そして、こうした能力を支えるものは、「豊かな感性」と、「強い精神力」と、「人間環境の全体像を見通す視野」と、「いくつかの専門的知識」と、そして「自らの知見を正確に伝達するコミュニケーション能力」であろうと考えております。

人間環境学部での研究テーマは、衣・食・住、家族、生活、人生、教育、言語、地域、経済活動、自然など、様々な分野がありますが、それらは相互に密接・関連しており、それらのいずれの分野においても必要とされる「デザイン力」は短期的な視点での効率性や合理性を目指すものではなく、困難な時代にあっても生きる力をもち、自信をもって生きることを目指すことであろうかと思います。すなわち、人間環境学部とは、二十一世紀に生きる若者に「次代を担い」、「社会に貢献し得る力と希望を与えることができる」、そのような学部であろうことを確信しております。

「香葉」の皆様方には、今後も新生・人間環境学部の行く末を暖かく見守っていただきたいと思います。そして、できますればお子さんやお孫さんをこの学部にお送り願い、「人間の在り方」について、ともに考えていきたいと考えております。今後ともにご支援のほどお願いいたします。

香葉会のこれから

＊　会長　古城房子　＊

あと二年後、二〇〇三年三月には、短大最後の卒業生が巣立ち、五十四年続いた女専、短大の歴史を閉じることになります。

一九四六年、戦災の焼け跡が残り、駐留軍のアメリカ兵があふれていた横浜三春台の地に、戦前は男子校であった関東学院に初めて女子教育の場として専門学校が開校されました。一九五〇年に、文部省による学制改革によって女専が短大に生れ変わりました。そして五十年余を経て、今度は短大が大学の学部として生れかわることになったのです。短大の名称はなくなります。五十年前、女専の方達が味わった複雑な思い、女専へのこだわり、思い入れを、今度は短大の卒業生が味わうことになりました。この変化を中々受け入れられない気持の方も多いと思います。しかしながら社会の変化によって短大も対応せざるを得ず、大学に吸収されて短大が消失してしまうかも知れない危機に抵抗して、女専・短大の歴史と伝統を継承する学部の誕生の為に、心血をそそいで奮闘してこられた学長、先生方、職員の方達のご努力を、数年来、身近にみてきた者として、この転換を心からお祝いし応援していきたいと思います。たしかに、短大は大学の一学部となり、何年か後には、学生の意識の中に「短大」の名は残らないでしょう。学生はあくまで大学生として入ってくるのですから…。でも新生の学部が、新しい人間形成の特色ある学部として成長してくれれば、短大の精神はそこに生きていると考えます。

「香葉会はどうなるの?」とよく聞かれます。女専、短大の初期は大学同窓会、燦葉会の会員であった時代もあり、又復帰の話も出ましたが、香葉会として独立して三〇年、会員数も三万人になります。あくまでもこの歴史を大事にして独自の活動を続けます。新しい会員が入らなければ収入も無くなるわけで、自ずから活動は制限せざるを得ません。会員からの年会費とか援助金を募ることになるでしょう。年一回発行のこの「香葉」も今回限りとなります。すでに事務局の縮小をしましたが、名簿の管理、情報の提供はしていきます。

会員みんなで新学部の発展を応援し、学校に協力していきたいと願っています。

今後も香葉会をよろしくお願いします。

女専のページ

鶯と雀と伝書鳩

（女専家1）佐藤　久子

昭和五十一年春彼岸、母の突然の他界に私は深い悲しみの底にあった。その葬儀の朝である。眠っていた私の耳に「久子ちゃん起きなさい。今日はわたしの葬式の日ぢゃないの、早く行って手伝いなさい」と聞える筈のない母の声。呼んでいる私の名前に鶯の啼き声が重なった。「あっ！お母さん」と夢の中で叫んで頭を上げると、確かに鶯の声。急いで窓辺の障子を開けると、ガラス戸の向うの手摺に止まっていた鳥がパッと飛び去った。すっかり目覚めた私は泣き乍ら、母が別れを告げに来たと、慰め顔の夫に言った。外は早春の朝日をうけて白梅が香り高く咲いていた。その後出窓に鶯は再び訪れることはなかった。

昭和五十五年五月、夫の母が永久の眠りについた。葬儀が済み、初七日法要のために会場に戻ってくると、小鳥が入ってきて祭壇の附近を飛び廻っている。「不思議な鳥だ、追っても逃げて行かない」と誰かが言い皆で見守っていた。小鳥は雀であった。私は姑だと直感した。義母はよく自室の窓から別棟の屋上附近を飛び交う雀の群を眺めていた。時には目の前の手摺にも止まる。「今日は何羽並んで止まっている」など口にしていた。

雀来訪はその時だけではなかった。七月お盆の頃、その日は休日でベランダの戸は開けてあり、一羽の雀がきていた。よくあることゝ気に止めなかったが、何とその中、チョンチョンと部屋の中に入ってきた。ソファに掛けている夫の所まで一直線に…。そして足元の近くを歩き廻っているのだ。奥の部屋で見ていた私がそっと近づくけはいで逃げ去って行った。「おばあちゃんが息子に逢いに来た」と二人で話し合った。その後屋内に小鳥が入ってきたことはなかった。

父が亡くなったのは母が去って十年目の年の五月であった。鳥のことはすっかり忘れていた。ところが来たのだ。告別式が終った翌日の夕刻六時頃、ベランダのガラス戸越しに外を見やった私の目前に、スーッと一羽の鳩が止まった。その頃は郊外から都内のマンションに居を替えていたが、前住居同様鳩害に悩まされ、鳩を見ると追払っていた。よく見るといつもくる土鳩ではない。双眼鏡で脚の金属管のナンバーが、86NA27777と読めた。「お父

さん、さすがドバトぢゃなくて伝書鳩だネ」とつぶやいた。どこからか来て此處で羽を休め明日は夜明けと共に飛び立って行くのだろう。翌朝、勿論鳩は居無かった。清々しい朝の光に、「さよならお父さん」と心の中で言い乍ら、その鳩の目的地までの無事を祈った。近くに広い公園がある為鳩の飛来は烈しく、その対策と糞害に手を焼いている私であるが、伝書鳩は二度と現れない。

この二十一世紀に古めかしい話ではあるが、私には単なる偶然の重なりとして忘れ去って了えない何かが、胸の奥に残っている。

雑想の記
〝思いつくまゝに〟

（女専英2）平尾　富子

早いものであれから五年、昨日の様に思われる日々が、アッと云う間でした。平成八年三月の寒い日に出発、桜に迎えられての帰国、在米友人達のメッセージをお伝えした日が、懐かしく思い出されます。

米国行きを応援してくれた友は、五十年記念の集いには元気で出席、卒業以来の友との旧交をあたためあって居りました。彼女とは、昭和二十一年三春台の校舎からの友でした。長いお付き合いの中で胃痛頭痛を含め何も無しという無類の健康人。リタイア後も検診、健康管理に努めて居りました。金沢八景から湾岸線で新杉田駅迄、東京に帰る友と三人楽しい一刻を過ごせた事、嬉しく思い出します。突然八月に発病、十月相生本店での女専五十年のつどいには欠席、友を誘って見舞った病室での笑顔は元気そのものでした。本人に知らせずの病名だった事、その後知りました。九年六月迄入退院を繰り返しながらの闘病生活、三日の夕刻天に召され人の命の儚さが悲しい夜だった事、思い出します。年一回のクラス会も二回にしたらの声もチラホラの昨今です。敗戦の翌年、未だ着る物、住む家、満足でなかった時代、悲しい事嬉しい事を語り育ぐくみ合った大切な学友の、お一人〳〵が元気でと、祈る様な近頃です。幸い米国在住の友は、バブルを懸念しながらも皆元気です。

カンザスの八千代さんは日米協会々長を四人制で続け、本業をリタイアし、全面的に会長職にと日米友好の御盡力されています。川崎さんは娘さんの御不幸と御主人の療養生活、近所のおばあちゃま達のボランティアで甲斐〳〵しく活動して居られたのが、ずい分昔の様に感じられます。叙勲で日本に来られた美与さんは米国在住の青少年達の為日米の懸橋にと、長い〳〵間の信念を貫いて居られます。

ミルウォーキーの石井さんは四人のお子さんに恵まれ長男長女は医学の道へ、下の娘さんは判事で活躍、私達が伺った時は弁護士として羽ばたき出した頃でした。月日の経過は驚くばかりです。子供達は全員独立、折角の大きな、ステキな部屋も、御夫婦だけで一寸淋しそう。今年リタイアされた御主人は七月に日本で学会とか。彼女はシカゴから近い静かな町でお留守番、時折りおしゃべりを楽しんで居ります。

ボストンの貞子さん、息子さんとは世帯を別にし一年に数回逢っていた娘さんは同じ棟に越してきたので気軽に逢えるようになったとの事。先年御夫婦で来日。語学堪能な方達なので早稲田大学図書館に通ったり、〝貞奴〟の資料集めに力を入れて居られました。御主人の日本通には頭の下る思いです。国内を旅し心を残しながらの帰米。そのことが昨日の様に思い出されます。予科一年間戦後混乱期だった故か、年代も職業も違う経験豊かな人達の教室で映画〝羅生門〟に出演女優だった方も居られた事記憶して居ります。戦中に作られたスバラシイ映画の放出で東京迄足を延ばし、ファンレターを外国へ送っていた事等懐かしく思い出します。

二時間目の礼拝。讃美歌、坂田院長の〝人となれ奉仕せよ〟の校訓が深く心に残り人生の教訓として持ち続けて居ります。仕事の関係で大勢の人達との交流がありますが、ふっと学院出の方との出逢いで、何とも云えない横浜人としての暖かみを感じます。何をどうという事ではありませんが、共通の何かがあるのでしょうか。最近その方と建築関係の事でお逢いする機会が出来ました。又昨年七月より最後の仕事になるであろう横浜市との賃貸契約〝シニアリブイン〟の建物も解体、設計、建築、その全てが高齢者に優しい配慮をしています。

老齢社会に突入の今、若年者の言動がとかく云われていた事を払拭する様な力で一日〳〵を積み重ねています。七一年間続けて来たクリーニング業工場跡地は〝高齢者アパート〟として再生しました。明治、大正、昭和、平成の時代を乗り越えた先輩達には、厳しく又優しく教育して戴いた事、感謝の気持ちで一杯です。本年の〝クラス会短大十一月の集い〟に合わせ金沢相生を計画して居ります。

第21回　関東学院県央のつどい

毎年秋に行われます燦葉会との合同同窓会が今年で21回を迎えることとなりました。神奈川県の中央に位置します、厚木・海老名・座間等近郊の卒業生の皆様、是非お出かけ下さい。同封のハガキにてお申し込み下さい。

記

日　時　平成13年11月10日（土）
　　午後六時から
場　所　厚木市中町三―四―十六
　　キンコン館中町店（カラオケルーム）
会　費　四千円（女性）

詳しくは香葉会事務局まで
☎&FAX　045―787―7859
事務局開室日
　月&水　10時～4時

覚え書（二十八）

―女専・短大小史―

上市二郎

早いもので平成十三年（二〇〇一）は「香葉」も三十号を数える年を迎えました。改めて月日の経つ速さには驚かされます。この冊子が誕生した三十年前は筆者も現役で会員の皆様に発送した頃が懐かしく浮かんできます。

時代は変って、そしてまた変って「香葉」第二十九号に於ける吉田博学長の挨拶の中にあります様に一応の流れを知ることが出来ました。いよいよ最近新聞紙上で、「キャンパスガイド」や「著名大学相談会案内」が目につき、具体的に関東学院大学の既設学部が明示されて、その後に「人間環境学部」二〇〇二年四月開設予定として載っております。また、〝関東学院は変ります！〟と云う見出しでのパンフレットには二〇〇二年四月、新学部及び新学科の案内が載っておりまして、そこに、五番目の学部として「人間環境学部」（学部設置認可申請予定）そして、その下に〔関東学院女子短期大学改組〕と示されておりました。

前にも記述してありますが、毎月短大月報と関東学院広報が送られて参りますので、学院内の様子が判り感謝しております。卒業式・入学式の案内は毎年女子短期大学から頂いております。然し住居地の関係もありまして仲々出席出来ませんでしたが、前記の如き状況から察しまして本年の入学式が女子短期大学としては最後になりますので出席致しました。時は平成十三年四月三日（火）でした。なお、卒業式については後の紙面に記録しておきました。

筆者が式場に案内され席に着くと、もうご父兄も加わり女子短期大学のチャペルは満席でした。午前十時からは専攻科（英語専攻）、英文科、幼児教育科、経営情報科で、午後二時からは専攻科（食物栄養専攻）、国文科、家政科でした。五月半ばの学院広報に依りますと、法人の各学校の入学者選抜状況が発表されております。女子短期大学も次の様に発表されておりました。英文科百十六名、国文科五十四名、家政科二百三十九名、内訳（家政専攻九十四名、生活文化専攻五十六名、食物栄養専攻八十九名）、幼児教育科百二十三名、経営情報科百八名、合計六百四十名、それに在学生（二年生）七百四十八名を加えると総合計千三百八十八名、その他に専攻科、英語専攻五名、食物栄養専攻三名の計八名でした。これが平成十三年（二〇〇一）の学生数であります。

これに関連して振り返ってみてみましょう。日本が戦争に負けて廃墟と化した三春台校地の建物、鉄筋コンクリート三階建の校舎だけが焼け残っていました。その三

階の小講堂で入学式が挙行されていました頃を。終戦と同時に学院本部は、経済専門学校、工業専門学校と新らしく女子の高等教育を行う＝戦後は特に女性の学力を高めねば＝と決意して女子専門学校を同時に申請したのです。準備を始めたのが遅かった為女専の設立認可が文部省から下りたのは四月十五日でした。従って入学試験は五月に入って二十四日と二十五日に行い、第一回の入学式は昭和二十一年（一九四六）六月一日に行っております。

その折の入学者は英文科七十七名、家政科六十名、それに英文科予科として二十四名、合計百六十一名でした。（香葉第一号及び第十六号の特集〝女子教育四十年を迎え〟を参照して下さい）：と記録されています。

さて、そこで次は卒業式について記録しておきましょう。前にも述べた通り卒業式も十何年振りかで出席致しましたが、十年以上の空白がこの様に変ったのかと変り様に驚きました。平成十三年三月二十二日（木）第五十回の卒業式で、入学式と同様午前、午後に分けて実施されておりました。当日午前中は予定がありましたので午後の部に出席いたしました。生憎車の都合がつかず、暫く振りに京浜急行を利用して金沢八景駅で下車、昔の様に真鶴会館近くのバス停で学院循環のバスを待ちました。が仲々参りません（発着場所が瀬戸神社の方に変っていたのを知りませんでした）隣りの富士急タクシーの方に廻りますと、なんと袴姿のお嬢さん連がずらりと列を作っていましたので、若い気分になって暫く振りにマンションの建つ海沿えのバス道路を夕照橋に向って歩いてみました。夕照橋上より眺める女子短期大学の校舎、その直面する壁に上から下へ縦の黒い帯状のガラス窓、その四階に突き出る見晴台部分が交わって暗に十字架を感じさせていました。あの時強引に造っておいて良かった、と今でも思っています。学校迄は矢張り十五分以上かゝりました。

式場は女子短期大学のチャペルで、もう既にご父兄（二階）と共に学生は席に着いておりました。神藤敬子さんの案内に従って前の席に着きました。プログラムは進み証書授与の折一人、一人、学長から授与されるのではなく、総代が壇上に上って授与される型に変っておりました。従って時間は早く運ぶことになりましょう。午前午後と二回実施する関係からでしょうか。前の席だったので足元の草履が目につき多かった様に感じたのは、袴のお嬢さん達でしょう。皆、同じ様に黒のガウンを羽織っているので和・洋の区別はありませんですが：：思えばガウンを揃えておいて本当に良かった。とつくゞ感じました。そして、式終了後のレセプション、父兄と先生方と卒業生が一堂に会して、お茶やお菓子を手に挨拶や互いに語り合い、思い出話しに花を咲かせ、ご父兄と先生方との懇談のひと時も今は無く、式終了後は親し

い友人達と、またはグループ別に分れて記念の写真を取り合ったりして、あちこちで談笑の声が流れていました。また、三月は教職員の方々にも色々変更のある月です。

関東学院の定年規程では満六十五歳を迎えた三月末で事実上退職と云うことになります。平成十三年三月の退職者は二人おりまして、会員の良くご存知の方々です。初めに英文科教授の徳永透先生（在職三十四年）、そして本年四月一日付にて特約教授となられ、暫くは英文科に残られます。もう一方は昨年急に法人事務局へ移籍を命ぜられていました法人の参事・総務部長の大河原幸男氏（在職四十一年二ヵ月）です。彼は香葉会の設立当初からご協力いたゞいており、この「香葉」即ち会誌内の―覚え書―設定に関しては良き助言を下さいまして、常に蔭の人としてお力添えを頂いて参りました。この紙面をお借りして心から感謝を申し上げる次第です。筆者も定年から既に十七年の歳月が流れて、いつの間にか八十路に踏み込んでおりまして、それからと云うもの難聴傾向に進み、その上、物忘れがひどくて、つく〴〵寄る年波には勝てないことが良く判りました。また、現職にある事務局の皆さんが香葉会を愛されて、種々なるご援助をいたゞいておりますことを心から感謝申し上げております。

さて、前号に於いては昭和三十九年（一九六四）一月四日から第一次の学生スキー教室、湊先生、岡村先生、中田先生が指導に当られ、第二次、第三次と行われた処まで記録されていました。昭和三十九年と云えば、一番記憶に焼き付いておりますものゝ一つは、米国の婦人ミッションから女子短期大学に初めての指定寄付がありました、と云うことです。それを頭金にして女子の寮が昭和三十九年三月にハンソン山東側に完成しました。（この女子寮及びルツ寮については覚え書八号と二十七号を参照して下さい）

また寮に関連して思い出すのは、何処に建てたら良いのか？女子学生の為場所捜しも大変困難なことでした。やっと学院内にする、と決定した折、以前から耳にしていましたことは、学院前の入り海、即ち平潟湾について漁業権の問題が解決をみたとか？市の計画通り埋立て工事がほぼ決定し実施されるのは何時からか？等々。その折に女子短期大学をハンソン山の方に移しては？と云う一部の声も耳にいたしました。この際、山を削るには大変良い時期と考えられました。学院内の六浦中高の岩楯幸雄校長先生も力を貸して下さいまして、ご父兄の中に関係する業者もおりますので「今ならこの土を埋立用に利用すれば経費も余りかけないで済みましょう」との事でした。その為早速当時の学院幹部、坂田祐先生や白山源三郎先生に直接相談し、お願いしてみました。（我々の学生時代、白山先生は大変学生に愛されていて人一倍人気がありましたので、先生のことは皆、源さんで通っ

ていました。筆者もその様な間柄を周知の事実として安易に考えたのでしょうか？気楽に！）勿論色良い返事を期待しながら・・・。短大の将来を考えれば是非そうして戴きたい旨の申し出をしたのです。処が、その折の回答は、次の様でした。「・・これだけ広い校地なので平坦続きよりは、一つぐらい小高い山があった方が良いだろう、しかしあの方面はミッションの土地に属しているので簡単には進まないよ。今の処、削り取る考えは無いから・・・」と云われ、筆者もそれ以上強く食い下がることは立場上出来ませんでした。

そして色々の事情を経てから（色々の事業は後述する予定）即ち昭和四十五年（一九七〇）八月、山を削り取る造成工事も完了して、遂にハンソン山の姿は消えてしまいました。その折は既に平潟湾の埋立工事も終っていて柳町と云う住宅地が存在しておりました。その為削り取った土は何処か遠くへダンプで運び出され、総費用は柳町が出来る初めに見積もられた金額の丁度十倍以上にもなりましたことは今でも忘れられない一つの記憶です。そして工事の記録に付随して、女子寮裏のハンソン山がなくなったので、寮と山との間の土留めのコンクリート壁（これは山の近くに建物を造る時は建築許可上必要とされているものです）この壁の取り壊す費用や寮の裏側のコンクリートはむき出し部分の塗装工費の費用を含め、思いの外の支出が嵩みましたことを思い出します。柳町を埋立て造成中であるならば十分の一以下の費用で済んでいたものを・・・節約に節約を重ねて総べてのことに当り良く吟味してから実施してきた女子短期大学の世帯では本当に残念でなりませんでした。

さて、工事の関係記事が少し長くなって仕舞いました。この新しい女子寮の献堂式が、昭和三十九年（一九六四）四月四日（土）午前十時より行われています。その新寮の入寮者は四十二名となっておりました。また、関連して記録しておきますと、旧ルツ寮は大学の女子学生を一時的に収容する予定であるが、目下の処入寮希望者は一名のみである。一週間待って希望者が無ければルツ寮は閉鎖する予定である。と記録されています。また、新寮のアドバイザーは四月一日より安藤寿々代教授に依頼する。近い将来には専任のアドバイザーを迎える予定であります、と。そして九月には寮の専任アドバイザーで宗教主事補として白山ミチ氏が就任されています。主に寮と宗教活動を担当してもらうことでした。学生五十名収容する寮ともなると給食関係で、専任の栄養士を置くことが義務づけられておりますことは周知の通りで今回は井口安喜子助教授にその任（給食業務責任者として）を受けて頂くようお願いする事としました。

同窓会（燦葉会）の総会が六月二十一日（日）午前十一時から開かれ、新女子寮見学旁た寮で昼食会を開きたい。との申し出がありました。新らしい所は早速利用さ

れているもので筆者などは鼻高々になって説明していたのを思い出しました。

この頃は新らしい学科について検討する機会が度々持たれていました。研究員が選ばれて色々資料に依って研究が進められていました。種々学科を研究するのも結構ですが学科を増やすには教室の手配も計画の内に組入れて進めなければ、当然の事として早速教室棟の計画にとりかゝり、また本部の財務部長との話し合いを持って資金計画を練るなど毎日が大変忙しかったのを思い出します。女子寮の建築費も四千五百万円強で米国からの寄付金は二万ドルでした。当時のレートで七百二十万円、これを頭金として借金で寮も完成したのです。そして取り敢えず夏休みを利用して短大三階建の屋上にプレハブ構造でカマボコ屋根の合併教室を本部の施設課担当で完成させ後期から使用開始。J四〇一教室と記録されています。新らしい学科も国文科という線が出されて七月十四日の懇談会に於いて、これを決定し、これに伴う推進委員が後日学長に依り決定する。と。この年の十月には学科増設推進委員は教務委員プラス斉藤講師で会合が持たれていました。そして図書関係、教授等についての話し合いがなされていた。と記録されていました。

国文科を増設する為の建物は女子寮に引き続き戸田建設にお願いすることとなりました。短大館裏側で神学部礼拝堂横、細長い土地で教室も細長の型で、うなぎの寝床の感じでした。これは短大別館と稱し落成は昭和四十年（一九六五）三月。この建物の献堂式は翌四月七日（水）午前十時から行われていました。建物は三六四坪と記録されていました。

さて、この年の北海道旅行は八月十六日（日）から二十七日（木）で、引率教師は鳥越ノリ先生と下田哲先生でした。

そして、秋の英文科・家政科二年生リトリート、於天城山荘は十月七日（水）八日（木）九日（金）迄、主題は「生」で、テキストは遠藤周作著「海と毒薬」で実施されていました。

記録を紐解いてみますと、十一月十四日（土）に理事会が開かれ、大学に文学部設置を研究する、と云うことが提案された。短大国文科増設案も賛成であった。なお、保育科設置を研究することも定められた。と報告されておりました。そして、昭和四十一年（一九六六）四月より国文科が発足しました。

以前にも度々述べてきたことですが、本学の家政科は被服関係の教員が多く、栄養学・食品学担当の専任の教員がおられないで、非常勤及び特約の教員をもって賄って参りました。これは科長の桧垣好子先生の頭痛の種の一つでした。仲々適当な良い方が得られませんでした。記憶に残っておられる先生方は、芦沢千代先生、森本喜代先生、道先生などが頭に浮かびます。丁度相川高秋学

長が四年制大学の副学長を兼務されておりましたので、短期大学は兵藤正之助教授が、短大主事をなさっておりました。その頃、国立栄養研究所の森本喜代先生からご連絡をいたゞきまして、早速兵藤先生が直接に林淳三先生のご自宅を訪問して、学院の歴史及び短期大学の現在迄の状況を説明いたしまして、是非にと要請いたしました。昭和四十二年（一九六七）四月一日付にて本学の家政科教授として着任されました。そして家政科長を経て昭和四十三年（一九六八）十月、公選学長第一号の学長に就任されました。昭和四十三年と云えば、四月初めに三階建短大本館の一部、木造部分を鉄筋の三階建に増築し文字通り短大の本館が完成し、学長室、会議室（出来る迄は家政科の試食室を会議室として使っておりました）広報室、事務長室と各部門の事務室が整えられました。印象に残るのはこの建物の献堂式が四月初めに行われたことでした。その時は大学の一号館も増築して今の型になりましたが、それが学生運動で占拠され、特に全国組織の赤軍派の拠点になっていました。とか？その為、当時は教職員も建物内に立入ることが出来なかったとの事でした。

そのような折、当方の献堂式に出席された坂田祐院長が述べられた言葉が忘れられません。丁度、短大の建物からみますと大学一号館が真っ正面に位置して良く見えていました。「見てご覧！あのような建物、建築学的には大変優秀な作品だそうだが、一般的には大変使い勝手の悪い建物で、狭い部屋が多く恰も潜水艦の内部を思わせる。献堂式も出来なくて全学連学生の巣と化して本当に困りものだ、そこへ行くと短大はいゝなあ！」と、そして、光熱水費、電話は自由に使われている、とのことでした。

次に、短大の本館を造る折にも将来のことを考えて、研究室や理化学実験室などに一部の壁をブロックを積んで壁とした所が何箇所かありました。ルツ寮のあった方向または古い大学の図書館の方向にと、土地を使用して良いと云われた折は直ちに対処出来る、この壁を簡単に抜いて次の建物への足掛かりとして、それに依り廊下にするか、部屋の入口にするか設計の段階で考える。常日頃土地が与えられることを願うのみでした。

昭和四十三年五月二十五日夜、大学の学生寮即ち青雲寮より出火、二棟焼失、これに依り大学紛争が一段と激しくなり毎日のように学生が集団で校内をデモって移動する。短期大学の廻りも日に何回となく練り歩くので授業が出来ず大変迷惑な日々が続きました。時折、どういう情報を受けて来るのか、突然に機動隊員が入って来ることがあって、その都度「此処は学校が違います、女子の短大であって四年制の大学ではありません」と説明しては戻ってもらいました。段々と険悪な情勢になってきましたので林学長始め男子職員達は毎夜半迄残って勤務

（警戒）をしたものでした。このような状態が長く続く様であれば、本部に対して林学長から、女子教育への種種なる悪影響を考慮に入れて対処して欲しい旨の申し出をし、幸いにして本館が出来たお蔭でこの建物の廻りを高い金網のフェンスで囲い、女子学生及び教職員は小さな潜り戸から出入りしてもらうようにしました。等々思い出されます。

さて、一応考えていた今回の記録も胸中複雑で、途中で思い出して斜めの方向に進んだり、学園紛争ももっと記述しようと思いながらつい印象付けられた部分のみ、となって仕舞いました。「香葉」第一号に記述した様に年代順に記憶を追って記述してみましょう、と意気込んでいましたけれども、あの時から三十年も経つと他者も筆者も総べてのことが変って仕舞い、これからは一体全体何の様になって行くのでしょうか。と、最後になりましたが筆者の気持ちで記録して置きたいと思います。それは前にも述べてあります様に、昭和四十二年四月から本学の家政科教授として就任されました林淳三先生。先生のお働きは皆様良くご承知の通りですが、古城会長のお言葉を拝借すれば、驚異的な手腕の持ち主の先生、筆者は緻密な頭脳の持ち主の先生と心に刻み込んでおりました。ご就任当時及学長職にあっても良く事務職員等と常に会合を持って懇談の時を与えて頂きました。そこで学院の歴史や短大の流れ様子を総べて吸収され、先生は学問以外行政面全般、頭に収めて常に色々の面でそれを活用されていた様にお見受けいたします。筆者など直ぐに忘れて良くご注意を受けたことを思い出します。短大の歴史の流れは、この「香葉」第一号から第二十号に亘り先生がご執筆なさいましたご挨拶の中に集約されています。是非ともご覧になって下さい。

なお「香葉」第十四号にも記述してあります様に、関東学院創立百周年記念行事として本学図書館の落成（五月）秋には生活文化研究所設立（十月）、学院創立記念式典於釜利谷校地（十月）、記念講演会は作家遠藤周作先生をお招きして行いました（十一月）これについては林学長が是非遠藤先生をお招きして記念講演会を開きたい、とのお話しがありまして顔の広い義兄小林静夫に相談しました処、学芸通信社の川合澄男社長を紹介していたゞきました。前にも一～二度お目にかゝっていましたので総べてが順調に進み、色々と事情説明して、十一月十四日（水）に記念講演会を済ませることが出来ました。こんな嬉しいことはありませんでした。色々と大変でしょうが林先生ご健康には十分気をつけてお過し下さい。

上市二郎氏紹介

昭和二十二年奉職。昭和六十年退職までの三十八年間短大の事務長を務められました。横須賀市在住。

短大五〇年を振り返って

＊座談会出席者＊

（女専英Ⅰ）佐藤　久子
（英2）元広　弘子
（英2）柳生　二三
（女高英2）大島　好恵
（家10）相吉　典子
（家12）村岡　愛子
（国1）山口　佳子
（国7）岡崎　敬子
（国7）葛城　容子
（家26）井上　啓子
（経10）浦上　恵
（国32）吉田　美佳

仲良く坂田記念館見学

短大が進化を遂げようとしている今、改めて『五〇年の歴史を振り返る』というテーマで座談会を開催いたしました。五月二十六日に三春台にある「坂田記念館」にて、終始、和やかな雰囲気の中、進められました。

『「香葉」三〇号を記念して、女専から現在までをそれぞれの時代の思い出と共に語り合って行きましょう。』という編集長の山口さんの言葉で始まり、まずは自己紹介からということでしたが、自己紹介だけでなく、思い出話に花が咲いていきました。

女専一回生、佐藤さんは、御殿場から三春台校地に通っていたということで、「電車の中が、勉強の場でした。」と通学の苦労もお話ししてくださいました。また、佐藤さんからの「女専は短大とは違うという意識もあったが、「香葉」に女専のページを掲載されるようになってから関わりが増えていきました。」という言葉を耳にした時、「香葉」が卒業生をつないでいく大切な役割を果たしているのだということを改めて感じました。

「四大生との交流が何よりも楽しく、学生時代をエンジョイしていました。」と語って下さったのは、家政十二回生の村岡さんです。「新しい調理室を初めて使い、感動しました。また、短大祭では、喫茶店とおでんの模擬店を出店し、本職の方々から色々なことを教わりながら楽しくやりました。」とおっしゃっていました。また、村岡さんの話の中で家政科と英文科の合同授業も多かったということで、短大全体が学科を隔てることなく、そして四大との交流も盛んだったのだと感じました。

国文七回生の葛城さんは、「ハンソン山の校舎と四大校舎の教室移動が大変でした。」と語ってくれました。

短大の校舎が室の木校地へ移転する期間の学生は、苦労されたのだということでした。休み時間中に移動しなくてはならないというのは、大変な事だったと思いました。

「受験をした教室で、自分が授業を受けている夢をみて入学を決めました。」と、何とも運命的な体験をされたのは、経情十回生の浦上さんです。学生時代は〝学友会〟で活躍されていました。「卒業してから初めて短大の歴史の深さを知り、素晴らしい先輩方の存在を知りました。」という言葉には、同感しました。〝香葉会〟に参加し、携わっていくことで今まで知らなかった短大のことに触れられる機会を与えてもらっていると痛感しました。

女子高二回生の大島さんは、「学生当時は、女専、短大共に在学していて、先輩方によく面倒を見ていただきました。学校全体がファミリーというような感じがしました友達がとてもたくさんでき、先生方に恵まれていました。また、学生の時に学んだ英語は就職後も役立ちました。」と充実

した学生生活を語って下さいました。

北九州からわざわざおいで下さったのは、英文二回生の元広さんです。前日の二十五日に二回生の同期会である〝さつき会〟があり、その足でいらして下さいました。「学生時代は本当に楽しくて仕方なかったです。先生を呼び捨てにするくらい仲が良かったですし、それを受け入れて下さる素晴らしい先生方ばかりでした。また〝香葉会〟を立ち上げるのに、毎晩会議をして相川先生にお手伝いしていただきながら頑張りました。」と〝香葉会〟の誕生に関わっている方の貴重な体験を聞くことができました。

英文二回生の柳生さんは、「終戦後に大連から引き上げてきて、小学校の助手をしていましたが、勉強がしたくて、聴講生として短大に入学しました。高校の卒業証明書は、夏休みの補習でもらいました。」と終戦の大変な時期でのご苦労を語って下さいました。また、「短大に入ったときに、パーマをかけている人が多く、みんな

おしゃれで、とてもびっくりしました。」と当時の短大生が流行の最先端であったということをおっしゃっていました。今も昔も若い女性はやはり流行に敏感なのだと共感しました。

家政二十六回生の井上さんは、学生紛争終り頃、短大へ入学され、「時々、ヘルメットをかぶった人達がいました。四大と短大の境にある門に先生が立っていました。」ということを教えてくださいました。私の中で、学生紛争というのは歴史上の事柄でしかなかったのですが、実際の話を聞いて初めて肌に感じることができたように思いました。また、井上さんは学生時代、〝学友会〟で会長としてご活躍なさったということで「短大祭について、名前を決めるのに、とても苦労しました。学校（関東学院）のシンボルであるオリーブの葉から〝オリーブ祭〟としたかったのですが、他ですでに使われていたために使用できなくなってしまいました。そこで、オリーブの色から〝Green Festival〟と決定しました。今の短大祭のパンフレットに〝GF〇回〟と記載されてしまっていますが、その前も短大祭は続いているのだという事を忘れてはいけないと思っています。」という短大祭の名前についての事実を語って下さいました。

家政十回生の相吉さんは、「リトリートでは、学年・学科関係なくみんなで楽しく過ごしました。また、先生方も一緒に遊んでくださいました。そして、卒業後は短大に残り、井口先生の助手として働きました。色々と苦労も多かった分勉強させていただいたと思っています。」という貴重なお話をして下さいました。また、相吉さんの助手時代に調理室を新しくしたため、引っ越しや、お披露目会の準備などとても大変で、夜中まで頑張ったと言うことでした。

国文一回生の山口さんは、「学生時代をとても楽しく過ごしました。部活で混声合唱団に入り、女性がいなかったので、とても大事にされました。部活での友達が多く、四大の図書館も利用させてもらったり、充実していました。」と部活につい

て語ってくださいました。また、四大生と一緒に休み時間に野島へ泳ぎに行ったりと金沢八景の校舎ならではの体験も話してくださいました。

「二年生になって、ハンソン山の校舎になりました。四大と短大を行ったり、来たり良く歩きました。」とお話しくださったのは、国文七回生の岡崎さんです。

思い出話を織り交ぜながらの自己紹介で、あっと言う間に二時間半が過ぎてしまいました。楽しい時間は過ぎるのがとても早いと感じました。

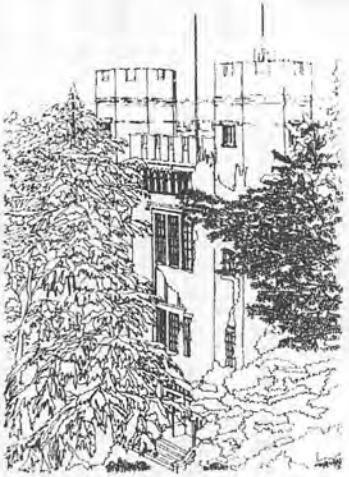
座談会を終えて

この座談会を通じて色々なことを聞くことができ、みなさんの心に触れることができたと思います。私が一番強く印象に残ってるのは、「同じ学校を卒業していれば、??年の年の差も関係ないわね。みんな同じ学舎の卒業生だものね。」という元広さんのお言葉です。初めて顔を合わせたにもかかわらず、一緒にお話をしているとつい引き込まれてしまう、ずっと前からの友達というのは大げさかもしれませんが、そんな気がしたのは私だけではないと思いました。

女専から短大、そして四大の学部へと進化していっても**『人になれ　奉仕せよ』**という精神が引き継がれていって欲しいと思います。そして、四大が、短大、女専を母体として進化していったということを忘れないで欲しいと思いました。また、この学校を選んで卒業して良かったと思えるような学生になって欲しいと思います。

卒業してからもこのような座談会を開ける、何年経っても集まれる会〝香葉会〟が、ずっと続いていくことを願うばかりです。

文責（国32）吉田　美佳



え・田中喜芳

実体験型取材

「若葉の頃」（思ひ出篇）

（経10）浦上　恵

それは、
　いつも何気ない風景だった。
そこは、
　いつも当たり前の空間だった。
けれど、
　かけがえの無い場所だった。

二〇〇二年春、関東学院女子短期大学は大きく発展しようとしている。

「人間環境学部」という新しい学部を立ち上げ、今までの各学科はより充実したものに進化しようとしている。

新学部誕生に伴い、学生数等の事情により今までの校舎が少し建て替えられたりするというので、私たち実体験型取材チーム一同は今の校内を探検してみることにした。

この日は、梅雨時と言うこともあり、あいにくのお天気ではあったが、久し振りに足を踏み入れた校舎の中は、なんだか懐かしい匂いがした。瞬時にその頃の自分に戻ってしまうような、そんな錯覚にさえ陥る。何年経っても、ここでは19歳・20歳の私なのである…。（含。願望…。）

思ひ出の庭

さて、詳細は私も把握していないのだが、簡単に説明すると「1号館」（図書館棟）の図書館は座席数を増やすための改築が、そして家政科のデザイン系の部屋はカリキュラム上、完全になくなってしまうとのこと。そして、「2号館」は全て変わってしまい、「ルツ館」の1階部はロッカー室へと姿を変え、「3・4号館」も少々の改築があるとのこと。やはり、人数が増えるということに関しての改築が大部分であると思われる。

それでは早速探検開始。

まずは、必ず一度は誰もがお世話になった場所。図書館へ潜入。

2Fの入り口を入ってすぐに目に付いたのは「検索用端末」ここ2年で随分と充実したとか。確かに私がいた頃はまだオフコンだったような…。今現在は4台のパソコンが設置されており、全校舎の図書情報が見られる。来年はさらなる充実が図られるとのこと。

そして3F。ここは専門書等の図書が多いため、学生の利用頻度が最も高い。学習コーナーの座席はいつも満席。そう、「レポート」の作成である。コレにはホントに、んもう、ね。（いわ

ずもがな…。）レポート作成や、試験勉強の合間、息抜きでよく図書館棟からの景色を見たものである…。

図書館

4Fも同じように学習コーナーがあり、コレまたいつも満席。（ある特定の期間だけだったのかも…。）5FはAVルームがあり、今はなんと、DVDが設置されているのだ。ちなみにこの5Fは、全て改装され、2部屋になり、パソコンを持ち込めるような部屋になるとのこと。

そして、2年間もっとも興味深かった家政・食物栄養の部屋が多数ある、1号館へ潜入。やはり、専門分野なので校舎の中は独特の匂い（美味しい匂いとか。）がいつも漂っていたし、なにより学生がカッコよかった！大きなデザイン画を持ち歩いていたり、白衣を着て歩く姿を見る度に「あぁ、カッコイイなぁ～。」とため息交じりに思っていたものである。各実習室はやはりスゴイ。食品加工実習室に理化学実験室。被服造形実習室に被服科学実験室。そして住居学演習室と、みごとなまでの「実習」・「演習」の嵐。中でも探検チーム一同が驚いた場所は、システムキッチンが教室内に4つもあるという何とも夢のある部屋「調理実習室」。私たち独身チームはさっそく「レッツ主婦」状態。各々妄想中…。「あ～、こんなステキなキッチンなら何でも美味しく出来ちゃうよぉ～。」と明らかに間違った判断を連発してしまっているので程々にして退場…。妄想はタダですので…。

続いて2号館へ潜入。

2号館は国文科と英文科の部屋が主で、語学演習室（LL）が何部屋かあり、応接セットが設置されている秘書実務演習室、そして…。「国文科演習室」である。ココは短大内で一番イイとウワサされていた演習室である。入ったことのある方はご存知かと思うが、あの演習室は一度入ったらなかなか出てこれない。（イイ意味で。）理由は言ってはいけない様な気がするので、ココ

国文科演習室

では控えておくことに…。（身近な国文科の卒業生に聞いてみて下さい。）

さてさて。次は3・4号館へ潜入。

ココは経営情報科と幼児教育科の部屋が主である。2階は経営情報科の演習室を始め、コンピューター室が主。実はこの私、経営情報科卒でありまして…。ちょこっと覗かせていただきましたが、カリキュラムも設備も随分と良くなって…。そして演習室では相当お世話になった記憶がある。インターネットを使用中にフリーズ（画面が固まってビクともしなくなってしまう。もう、お手上げ状態。）してしまったり…。いつまでもゲームに夢中になってしまったり…。リアクションが大きいので騒いでしまったり…。いやはやお恥ずかしい。ま、コレも思い出でござる…。

3・4階は幼児教育科の部屋。この学科も専門色の濃い学科だったので、興味深い部屋が多い。臨床心理室やリズム教室、音楽室。そして、楽器練習室。個室にピアノが1台ずつあり、そこで未来の先生達は日が暮れるまで、鍵盤に自分の汗を落としながらレッスンするのである。（注：あくまでもイメージ。）ちょっと広めの一室をお借りして、毎年恒例の、「Kさんのコーナー」である。今年はミニリサイタル。アベマリアの弾き語り～エリーゼのために～小犬のワルツ、ラストはショパンの別れの曲。などなど、思わぬ所で

システムキッチン

染色実験…？

人生を設計するのかな

特技を披露してしまったKさん。終了後、「あ〜、こんな事なら練習して来れば良かった！本当はもっと上手いんです!!」とのこと。その機会を探検チーム一同心待ちにしております。

21世紀は…コンピューター？

さて、各学科の特殊な教室が多い、1号館〜4号館を探検してきた私たち。戻ってきたらすっかり汗だくであった。イイ汗かかせていただきました。でも、こうやってじっくり見て歩いて思ったことは、ココに居たのはたった2年間だったのに、思い出や、蘇ってくるキモチは何十年分にも匹敵するほどの量だということである。

この2年間で自分の夢をつかんだ人もいるだろう、ステキな恋愛をした人もいるだろう、一生の友達を見つけた人もいるだろう。泣いたり笑ったり、毎日様々なことが起こって、日々成長していった自分を、今になってようやく見ることが出来た気がする。ココを通過していった沢山の女性（ひと）（男性がいたときもあったからなぁー…。）たち一人一人の様々な思い出や、努力や、汗や、涙や、笑顔が、今の関東学院女子短期大学を作ってきたのだろう。二〇〇二年の春、大きく発展しようとしているこの学院は、姿・形はすこし変わってしまうかもしれない。しかし、かつて、女専から短大に発展したようにコレはこの学院が発展して行くためのステップの一つであると思う。より良い学習の場を、時代に合った学習の場を、そして未来をしっかり見据えた学習の場をめざす。それが今回のステップであると思う。名前や、思い出の場所が無くなってしまうのは少し淋しいが、キチンと心の中に残るのだからいつでも蘇らすことはできるのだ。それに、ボンヤリしていられないのだ。私達も負けずに飛躍しなければ！今回の探検はそんな風に私に思わせてくれたのである。

皆さんも、ぜひ、探検してみて下さい。懐かしい友人や先生と。あの頃の自分に戻りましょう。皆さんの来校を**ホームカミングデー**で、お待ちしております。

それは、
いつも何気ない風景だった。
そこは、
いつも当たり前の空間だった。
けれど、
かけがえの無い場所だった。
そしてこれからもそれは変わらない。

●ハンソン山から●

先生方にアンケートを戴きました。先生方の本音が…。

1．もし先生にならなかったら、今何をなさっていたと思いますか。
2．20歳位の時、どんなことを頑張っていらっしゃいましたか。
3．21世紀に期待すること。

幼児教育科
犬木瑛子先生

1．高校のころ、学校放送を担当していて、アナウンサーになりたいと思った時もありました。でも容姿も悪いし、語学力も無いし、無理でしょうね。短大の先生になれて良かったと思っています。

2．女子大に在学していましたが、学校の勉強はあまりしないで、ピアノを弾いたり、近くの教会のオルガンを聞きにいったり、音楽に夢中になっていました。結局、趣味が高じて女子大を出てから音大にいってしまいました。

3．ITの発展でますます便利な世の中になることでしょう。でも、それとひきかえに他人を思いやる優しさや、心の豊かさを失ってほしくないですね。期待と願望かな？

英文科
立花桂先生

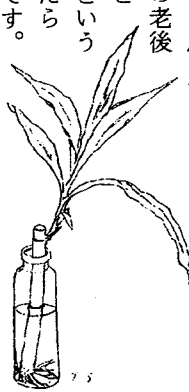
1．私が育った時代は戦後の混乱の中でした。両親も日常の糊口をしのぐだけに専念しており、将来の夢などで相談したことはありません。しかも田舎育ちでしたから、回りにモデルとなるケースもなく、紙芝居とか、稀に見る映画とか、図書室で読む書物とか、ごく身近な中から刺激を受け、ただ漠然と将来を考えておりました。しかし、どういう訳か、小学生の頃から大学へは行くと両親に伝えており、それが現実に近づくにつれ、経済的

に大丈夫なのか心配で、高校時代はかなり暗い時を過ごしたようです。大学時代もアルバイトとクラブ活動（英語研究クラブ）で大体が過ぎ去りました。短大の先生になったのも40才の時ですし、それまでは色々な仕事を転々としながら専攻科や大学院へ行って勉強だけは続けておりました。もし先生になっていなかったら、今ごろはどうしているのでしょうか？恐らくはリストラに怯えるサラリーマンでしょうかね。これまでの私の人生はあまり自慢できるものではありませんが、ただ一つ言えることはその時々をいつも自分に真剣に生きてきたということでしょうか。そうすると必ずチャンスが巡ってくる。それを感謝しながら、日常を真剣に過ごしていく、そうして"The old soldier shall just perish"となるのでしょうね。

2．大学三年の時が20才でしたから、その当時行っていたことをお答えすればよいと思いますが、当時は結構理想に燃えており、英文科に通学しながら、英語を猛烈に勉強しておりました。自分の英語をブラッシュアップして、日本の英語教育を変えるなどと思い上がっておりました。昼は大学へ行き、必要最低限の授業に出て、あとは200人以上の会員がいた英語研究クラブの委員長としてクラブ運営と活動を行い、夜は外人観光ガイドや英会話学校講師のアルバイトをしておりました。アルバイトは結構よい待遇だったので、経済的にはかなり恵まれていたと思います。大学二年の時ですが、ひょんなきっかけからＮＨＫ教育テレビの英会話番組に三ヶ月ばかり出演する機会を得たことは生涯の思い出です。これも当時の私の英語学習への情熱をかきたててくれる大きなきっかけとなっていたことは間違いありません。

3．どういう世紀になるのでしょうか。環境汚染が益々深刻化し、コンピュータがコミュニケーションを支配して人間同士が益々相互に孤立し、ゴミの山に囲まれて、現実から離れたバーチャルな寂しい世界に住むという恐ろしい世紀となるのでしょうか。明るい世紀とするためには人間がお互いに安心して過ごせる世界を造らなければならないと思います。人間同士のコミュニケーションがスムーズに行えるよう全世界の人々が自分の母国語と、もう一つ、世界の共用（共通）言語を身につけて、それぞれが相手を思いやりながらスマートに意思疎通が計れるようになって欲しいと願っています。具体的には英語をスマートに使いこなせる人が多くなって欲しいと思っています。

個人的には自分の老後を英語を母国語とする国で過ごすという夢が叶ってくれたらこの上ない幸せです。



経営情報科
松下倫子先生

1・SE（システム・エンジニア）だと思います。

2・コンピュータの勉強を始めた頃です。学校の授業だけでなく企業主催の講座にも参加していました。初めて中古のパソコンを購入したのもこの頃です。プログラミングに熱中していました。産業構造を勉強するために経済学部に進学したはずが、コンピュータのゼミを選択していました。おかげで今の自分があります。

3・誰もが自己の能力を活かせる場や機会が与えられる社会。

坂田記念館へのご招待

坂田記念館を香葉会の皆様にご案内致します。

記念館は、三春台の校地にあり、1990年（平成二年）六月十四日に、学院関係者の熱い祈りと協力によって開館されました。坂田　祐先生の業績と人格と理想と祈りが込められております。

特に三春台で勉学に勤しんだ皆様、是非、記念館までお越し下さい。そして若い卒業生の皆さん、母校の原点があります。懐かしい学院の写真等たくさん展示されております。

集会所も併設されておりますのでクラス会・同期会などにも利用下さい。（二階は霞ケ丘教会となっております。）

場　所　横浜市南区三春台四―一
開館時間　九時から四時　月曜日から金曜日
（事前連絡にて土曜日・日曜日も開室できます。）
休館日　関東学院中・高等学校（045-231-1001）
香葉会事務局（045-787-7859）月&水

講演会要約

第十六回（二〇〇〇年十一月）香葉会主催講演会は「国境なき医師団」から岩川眞由美先生にお越しいただき、緊急医療の現場のお話しを伺いました。

岩川眞由美先生編

四十歳を過ぎて自分の仕事にもある程度自信がつき、人生の後半戦、今の仕事の他に自分は何をやりたいのかな、と思って「国境なき医師団」に入った。日本人のボランティア活動というと、自分は最低限の生活をして奉仕活動をするというが、「国境なき医師団」の性格はそうではない。自分の生活は自分の生活、自分の知的生活を保ちながら自分にできる最高のベストを尽くす、という考え方の団体である。

今、私達が迎えていく高齢化社会の中で、私達は新しい老人像を作らなければならない。自分のやりたい事をしていながらそれは全て、或いは一部人の為になっている、そんな利他的なエゴイストになっていく事が、新しい老人像に繋がるのではないかと思う。

この活動もその一つで、毎日の仕事の他に、何か利他的で自分が非常に満足できる事をやりたいという気持ちとこの「国境なき医師団」の仕事が繋がった訳である。

一昨年の一月から六月まで中国で行われているプロジェクトに参加した。広西省の桂林からもっと山に入った所では、この五年の間何回かの洪水で沢山の人が亡くなった。その緊急医療チームとして「国境なき医師団」が医師を送ったが、そこの医療体制が余りにひどかった為、長期的なプログラムを組む事になった。地方では医療制度が崩壊し、医者のいない様な状況になっている。中国全体では、北京を中心に六個位のプロジェクトが行われている。北京から飛行機に乗り、更にジープで十時間以上も山の方に入った所に大寧（ダニエン）という所がある。最初に拠点を置いた所で私が六ヶ月居たのはそこである。

住んでいるのはネオ族の人達で、米を作り、動物を育てて大家族で暮らしている。ネオ族の人達はとてもよく働く。奥さんは必ず野良に行って旦那さんの手助けをする。水汲みは女の子の仕事で、歩ける様になったら少しでも自分の家に水を運ぶ。男の子は小学校には行かず、その位の年齢になったら野良に出て働く。耳の聞こえな

い男の子がいた。ハンディキャップのある子は、実の親は可愛がるが親戚からは厄介者にされる。その子は家で掃除をしたり、豚に餌をやったり、できる範囲で一生懸命働いていた。働かない人は死んでしまう。働くか死ぬかといった感じである。

私達には四つの仕事があった。一番大事な仕事は、大寧村から担当した十一個の村々を訪ね、そこで医療活動をする事である。村によっては八時間程山を登って行く。村の人達が野良仕事から帰って来る夕方に着ける様に大寧村を出発する。病気でも働いているので、昼間に着いても誰もいない。まずは怪我をしている人の傷を縫ったり、膿みを取り除いたり、救急的な事を先にやる。次に結核の人を見つけたり、肺炎の子供に注射したりする。三番目に慢性の病気の人を訪ねて薬を差し上げる。それで大抵は十二時位になり、そこから宴会が始まる。朝は野良に出る前に診てもらいたいという人達が夜明けと同じ位に来る。七時か八時まで一生懸命診察し、皆が仕事に出る頃に私達も次の村へと向かう。

二つ目の仕事は、村に第二の裸足の医者を育てる事である。裸足の医者とは、約二年間の医療教育を受けた者で、緊急事態には対応できる様な医療従事者である。ここでは医療をしてもお金は貰えないわけで、自分のやっている事によほど意味があると思えなければ続けられない。人の為に働く楽しさを理解した利他主義の人でなければならない。

三つ目の仕事は、一ヶ月半に一回、各村の第二世代の医者になるべき人が大寧村に降りて来て、私達の講義を聞いてもらう。そして通算十一回の講義で裸足の医師としての免許を与える。普通医学部の学生が六年間勉強する事を十一回の講義でやるので、教える疾患も非常に限定する。授業は詰め込み式ではなく、病気から思いつくキーワードを書かせてそれを使って説明したり、私が患者の役になって問診の基本を説明するなど、自発的に勉強していく為の新しい教育を取り入れている。又、ゲーム感覚で単純な知識を覚えさせる為に、私が作った双六を使ったりもした。

四つ目の仕事は、皆さんからの寄付金を使って大寧村に新しい病院を建てる事である。今、村の病院の手術室には窓ガラスがなく、ゼットライトも手術をしている間に段々と降りて来る。窓ガラスがないので夏には入って来るハエを追いながら、頭でゼットライトを支えて手術するといった具合である。又、水道設備が整っていない為汲んで来た水を煮沸して使っているので、きれいな水を十分に使う事ができない。

段々日本は変わってきて、新しい老人に私達はなっていくわけだが、こういう社会が世界のどこかでまだあるという事である。

要約（国31）坂東　奈苗

クラス会報告

英文科二部合同クラス会

秋半ばと言うに、未だ日差しの強い平成十二年十月七日神奈川県で一番乗降客の多いと言われる横浜駅東側のスカイビル二十七階に在るレストラン「横浜クルーズクルーズ」で今年も短大英文科第二部のクラス会を開催致しました。一年ぶりの再会ですが昨年参加された方々も体調を崩された一人を除きみんな元気な顔を見せてくれました。特に今回は昨年話題に上がった高橋茂彦（五回卒）さんが伊藤進（六回卒）さんとご一緒に参加された事は当クラス会にとって今後更にこの会の輪を広げると言う小林守信会長のご希望にも添い、喜ばしい事だと思っております。両氏もご自分達の伝で次回のクラス会に、もっと多くの卒業生を参加させたいと話しておられました。聞くところによると平成十四年に我々の短大が時代に即応して発展的に四年制大学の人間環境学部に改組転換するとか、しかし我々の短大卒業生の同窓会は何時までも存続し、それぞれのクラス会が継続して開催され、更なる結束と親睦が図られる事を願って居ります。今年の会の参加者は十四名でしたが、十二年半の君津市の生活から横須賀市に移転し、ご高齢にもかかわらず当会に毎回ご参加される上市さん、我々同級生の最高齢者八十三歳の鈴木さん、「老人と高齢者の違い」をいろいろと述べられた、相変わらず元気で神戸から参加された井上さん等、参加者各人の体験談を聞くことが出来二時間半の予定が更に三十分延長して閉会致しました。最後に高齢にもかかわらず本年十一月からJAICA国際協力事業団のシニアクラスの派遣者として二ヶ月間タイ語を勉強したりして、タイのバンコックで一年間英語で一〇〇人以上のタイの航空管制官の養成をする為に、ご夫妻で赴任する門井さんのご健勝を祈り、二十一世紀最初の年のクラス会に全員が再び元気で参加出来るよう心から願って居ります。

（英Ⅱ）中村武雄

さつき会

二日続いた雨もさつき会の五月二十五日にはすっかり晴れ渡り、勝手知ったる我が庭のような横浜駅東口駅前の崎陽軒本店にて開催されました。九州からこの日を楽しみに出席された元広さんに勇気づけられ、又出席の筈の宮下・青木・前川・吉川さんに思いを馳せ、慰問の色紙を書きながら懐かしい歌を唄い三春台の青春時代が彷彿として蘇ってまいりました。香葉会の役員

の吉屋さんより現状報告を伺い、香葉会の未来を話し合いながら出席者十八名全員でカレッジ・ソングを勢いよく合唱し、来年の古希に向けて卒業生健在を確かめ合った楽しく充実した一日でした。

（英2）菅原千代子

オリーブの会

二〇〇〇年十一月二十五日（土）

家政科十二回（昭和三十八年卒）オリーブの会が鳥越先生をお迎えして、ランドマークの横浜ロイヤルパークホテル「皇苑」にて行なわれました。

美味しい中国料理を戴きながら、お元気で主婦現役とおっしゃる鳥越先生のお話、はるか遠い、四国より出席の方、卒業後初めて出席の方等、二十二名の出席の盛会で学生時代の懐しい話や、現在の活躍の様子等、話題が尽きませんでした。

二次会は、眺めの良い「シリウス」に席を移し和やかな楽しい一時を過ごす事ができ、次期幹事も決定し、再会を約束し散会しました。

（家12）織田明美

中田先生を囲んで

幼教七回生（一九八一年卒）のクラス会が二〇〇一年六月九日、短大の三号館三階の特別教室で行なわれました。

母校ニュース

▽井口伸先生ご逝去

経営情報科で会計学の授業を持っておられた井口伸教授は、去る八月一七日肝臓がんのためご逝去されました。五四歳でした。

先生の授業に対する熱意は大変評価が高く、落胆する学生の姿が印象的でした。

心からご冥福をお祈りいたします。

▽新校舎「エテルニテ21」来春完成

現在改組転換申請中の人間環境学部のシンボル的新校舎「エテルニテ21」は、平成一四年三月の完成へ向けて着々と工事が進んでいます。

エテルニテとはフランス語で「永遠」を意味します。

建物は地上4階建てで、学生食堂、ゼミ室、事務室、インターネットが利用できるスペースが整備されます。

完成予想図

▽学院クリスマス

平成十三年の『関東学院クリスマス』は来る十二月十八日（火）横浜みなとみらい大ホールで開催されます。

どなたでも入場できますのでどうぞご参加ください。

詳細及びお問い合せは香葉会事務室又は短大庶務課へお願いいたします。

香葉会（〇四五－七八七－七八五九）

庶務課（〇四五－七八七－七八〇〇）

編集・ホームカミングデーの企画協力委員

五月に行われました年度委員会にて承認され、ホームカミングデーの委員が決定致しました。

編集委員に新しい委員を加えて企画をすることになりました。

古城房子・相吉典子・井上啓子
小濱朝子・村岡愛子・山口佳子
岡崎敬子・葛城容子・川上智子
坂東奈苗・浦上　恵・谷田部直子
吉田美佳・金子知代・北山めぐみ
澤田絵実・松野みどり・山崎恵美
秋葉奨子

編集雑感

▼今回は、30年を振り返ると、三春台の頃、大学と記念号です。50年代に同じキャンパスの頃、そして現在、関東の校舎、それぞれの世代の自由な雰囲気を感じていたあの頃、誰もが、若葉の頃を過ごした方々が活躍してくれました。こ、数年は孫のように若い後輩達の参加により、益々笑い会の多い会の話を楽しみながら、原稿書きや校正をしてきて、今年で、編集のための協同作業も終るのかと、淋しい思いがします。年代を越えて若い方達と交流のできる同窓会のよさをつくづく感じます。読者の皆様も、この小冊子を楽しみにしてお便りを下さったり、記事に協力して下さいました。こと、心から御礼申し上げます。今後も時々、さやかなニュースをお送りしたいと思います。香葉会は存続しますので、折にふれご連絡下さい。

▼思えば「香葉」一号の創刊記念号から三十号の最終記念号まで、編集のお手伝いをしてきたことになり、我ながらその長さに驚きます。苦労はすっかり忘れて楽しかったことばかり思い出します。スタッフに恵まれ、どの時代もそれぞれに頼もしい方達でもあります。

▼卒業して〇年。香葉会の編集委員となって10年がたちました。皆様の協力のもと毎回楽しい企画・編集ができました。そして今年の記念号は楽しさい時間をもつことができました。元広さんの「関東学院の卒業生はどこへ行っても関東でつながっている。同窓の方々は皆、お友達なのよね。」と話しをされたのが印象的でした。

▼世代をこえての香葉の編集委員達、なごやかに、心許し合い、認め合い、和気あいあい、笑い、とおしゃべりし合い、華やかな編集咲きいきとだから、そこと云う想いを、会議でも、共関東学院短大の編集会議を同窓会生活を通かの学生活いたとでいしたがら、の毎回忘れられる重ねる度に実感致しました。仲間う、同志、一杯です。頂き。

▼「あの取材楽しかったネ」いつも笑にいの絶えなしいかんな明るい強力編集委員会。大揃くった変わる冊子香葉会と携わる香葉のメンバ｜は｜私自年程に香葉なるこ葉ろ子ってまの歴史。毎に会にいらもだげの一会り部がこにとなのっ奥年を重ねる十自分をはま浸透する。

▼おしゃべりな私の書く原稿は、やはりおしゃべりで、うるさいモノになってしまいました。何しろ「実の体験型取材」ですので、まるで誰かの話をきくように読んで頂けたらコレ幸いです。

▼あっという間に3年目の編集委員。先輩方や後輩達と、時には学生の頃に戻った様な気分で楽しく活動できました☺

学生の頃には見る事のなかった学校の姿や短大のこれからなどにも触れて、今でも短大を身近に感じられます。何より様々な年代の方達と一緒に一つの物を造れた事がとっても楽しかったです☺

▼今回の座談会に参加できたことを光栄に思います。「香葉」の中では、まだまだ紹介できなかった部分がたくさんあり、心残りではありますが、読んでくださる皆様に少しでも雰囲気が伝われば幸いです。「香葉」を通じて、たくさんの人と出会い、楽しい思い出をもらいました。

「香葉」30号が、皆様の心に残るものとなり、思い出話を語り合えるネタ本になれば、と思います。

▼文章を書くことが下手、本を読むことも下手……。こんな私が編集？

香葉会の一部となっている「香葉」を創る楽しみは企画をしている時・原稿依頼をして待っている時のドキドキ感……。でき上がった時の嬉しさ……。

「香葉」を読んで下さる会員の皆様に感謝。

平成12年度決算				平成13年度予算
収入の部	予算	決算	増減	予算
会費	(@18,000×932名) 16,776,000	16,776,000	0	(@18,000×893名) 16,074,000
賛助金	500,000	761,303	△ 261,303	500,000
預金利息	3,000	2,990	10	3,000
雑収入	5,000	138,706	△ 133,706	5,000
前年度繰越金	1,948,443	1,948,443	0	3,167,448
合計	19,232,443	19,627,442	△ 394,999	19,749,448

支出の部	予算	決算	増減	予算
通信費	3,300,000	3,098,413	201,587	3,500,000
印刷・製本費	2,000,000	1,861,691	138,309	2,200,000
総会・会合費	2,400,000	1,915,665	484,335	2,400,000
交通費	550,000	516,800	33,200	550,000
用品費	1,100,000	362,617	737,383	200,000
委託費	500,000	195,980	304,020	1,000,000
謝礼費	50,000	10,000	40,000	150,000
消耗品費	100,000	29,660	70,340	100,000
人件費	3,200,000	2,931,966	268,034	1,600,000
合同同窓会分担金	(@300×932名) 279,600	279,600	0	(@300×893名) 267,900
新人会員歓迎費	1,600,000	1,337,700	262,300	1,300,000
慶弔費	300,000	150,940	149,060	300,000
寄付金	200,000	200,000	0	200,000
雑費	52,843	18,962	33,881	81,248
予備費	100,000	50,000	50,000	100,000
特別会計	1,500,000	1,500,000	0	5,000,000
名簿発行準備金	——	——	——	0
奨学金基金	2,000,000	2,000,000	0	800,000
(小計)	19,232,443	16,459,994	2,772,449	
次年度繰越金	0	3,167,448	3,167,448	
合計	19,232,443	19,627,442	394,999	19,749,448

賛助金をご寄付下さった方へのお礼・香葉会の会員の皆様へのお願い

昨年も後記の方々から総額「￥761,303」をお送り頂き、厚くお礼申し上げます。

今後、皆様からの賛助金で「香葉」の発行ができることを祈念しております。皆様のご協力なくしては成り立ちません。よろしくお願い致します。　（順不同・敬称略）

教職員

坪井　昇
松本久子
田中順子
犬木瑛子
菊地安子
矢嶋道文
上市二郎
益　昌子

女専

篠原愛子
佐藤久子
中根悦子
大高悦子
城　多恵子
白石真砂子
井田玲子
渥美裕子
飯吉玲子
鶴見愛子
内田駒子
西本素子

女子高

青木美代子
梅山フク江
大島好恵
古郡綾子
佐藤みち子
神農貞子

英文Ⅱ

錦織マサ子
光畑　清
小島美浹
松本政子
高山政子
千田節男
冨田欣一
岩野由美子
佐野妙子
岸　澄子
高橋茂彦
渡部　勉
林　嵩
小林守信
井上春水
鈴木利治
門井正弘
中村武雄
長谷川伸一
竹内恵美子
小坂宣雄
佐藤靖男
成瀬節子
伊藤　進
青木昭次郎
土山　忠
河名義弘

英文

石渡朝子
辺見裕子
細田喜久子
古城房子
菅原千代子
谷田部敦子
奈良喜美枝
玉木宮子
加瀬雅子
川上妙子
平井道子
花岡淳子
澤野洋子
伊藤陽子
近藤睦子
松野文子
坂上朋子
石田みのり
中村紀佐子
影山直子
馬越千恵子
光島洋子
笹谷弥栄
岡田温子
米原香代子
保科恭子
森　静恵
岩沢克恵
平井紀枝

佐々木晶美
小田牧子
徳江奈美
徳江美和
田辺洋子
田辺和子
村上節子
市山久美子
内田康子
桐原千恵
越智協子
小谷泰子
中川あや
露木宏子
松友明見
サリス良江
中内純子
佐生貴子
岡崎昌代
市川君江
岩間洋子
安藤憲子
野尻良子
高橋恵美子
松本紀子
小野江まち子
吉田朝子
長崎洋子
田辺芙紗子
細田喜久子

増田安喜子
江波戸房子
柳生二三
丸山勝代
朝木圭子
黛　博子
菅野弘恵
竹内恵美子
田中久恵
田丸瑠実子
(故)北　芳子
長谷川恵子
横部久仁子
西村麻由子
月本鈴子
岡村幸子
小池秀子
相原梅子
山口はるみ
石崎キク
髙橋静子
梅田玲子
菅谷麻衣子
主馬野敦子
羣Vanseeuwt
中西愛子
三富正枝
矢野紀子
吉屋保子
小濱朝子

志賀ミチ
宮松眉美
ヤリッ英子

英文専攻

中島久里子
田代節子

国文

長田久美子
吉田初美
馬渡正恵
高橋美佐子
原嶋曜子
小出美智代
納所節子
福井英子
山田信子
荻野光江
熊谷美恵子
古屋智美
田中直子
吉田美津子
川島久里
五十嵐節子
多々良由紀子
横田真由美
葛城容子
長谷川不二恵
山口佳子
岡崎敬子

家政

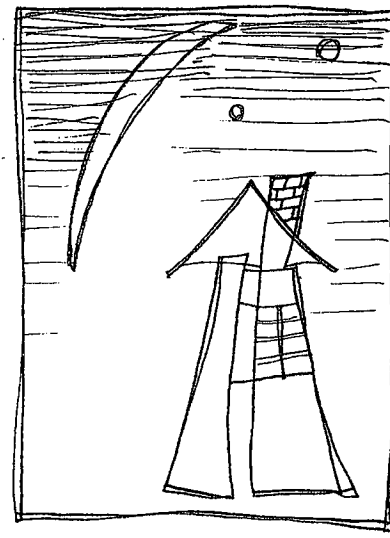
近藤鶴子
狩野佳子
高橋洋子
八木香織
笹川里恵
大川幸子
原田二三栄
岡崎淑子
仲村恵理子
原島津根子
前田博子
庄野幸子
露木玉恵
渕上龍美
浅葉勝美
渡辺冴子
会沢友希
森　禎子
稲垣愛子
佐藤美代
福嶋浩子
渥美彰子
伊藤綾子
菊地和子
三浦妙子
山下順子
飯塚まり子
小林三恵子
鈴木みどり

古賀恵子
平井初枝
星　友子
石原律子
山下美紀
圓岡悦子
村岡愛子
舟橋智子
島田絵里子
菅野富予
松田良子
松本博子
山口寿美子
福田しほり
藤平良子
江成千恵子
金子貞子
小島妃美
五十嵐増枝
清田恵美子
横山涼子
高橋みどり
小俣恵子
福島美和子
藤澤弘子
前田純子
後藤美和子
百合本真弓
山本初江
祖父江有加

福間世紀子
足立求子
鈴木恵美子
石田禎子
井上多恵子
馬屋原有利子
飯田染子
関根幸子
千川奈緒美
安彦潤子
匿　名
井上啓子

幼教

関口眞喜子
松浦依恵
島田郷子
鈴木弥生
原　由美子
山中和美
溝口協子
芝　久江
山内奈緒子
長崎　薫
伊澤敏恵



先輩諸姉へ求人のお願い

本学卒業予定者の就職活動につきましては平素より暖かなご援助、ご協力をいただき感謝申し上げます。

学生達は将来への希望を胸に企業の扉をたたいておりますが、昨今の社会情勢の中、女子学生への門戸は大変厳しいものになっております。

つきましては、先輩方のご関係で求人のお話がございましたら就職課へぜひお知らせくださいますようお願い申し上げます。

〒236－8503　横浜市金沢区六浦町4834　Tel（045）787－7868
関東学院女子短期大学就職課　Fax（045）781－1491

香　葉　第30号

平成13年10月1日　印刷・発行
関東学院女子短期大学・香葉会
代表者　古　城　房　子
横浜市金沢区六浦町4834 郵便番号236-8503
関東学院女子短期大学内
Tel・Fax（045）787－7859

関東学院同窓会・香葉会誌